

宮本亜門と嘉目真木子大いに語る！

オペラそして「マダムバタフライX」によせるメッセージ

20世紀の幕開けとともに生まれた、イタリア・オペラの最高傑作「蝶々夫人」。ジャポニズム香る美しいアリア、愛の悲劇—

ブロードウェイミュージカルからオペラまで多彩に活躍する演出家、宮本亜門が、この名作を21世紀の目でとらえ直し、新しく蘇らせます。

プッチーニの書いたイタリア語のアリアの美しい旋律と物語はそのまま、さらに宮本亜門独自のアイデアによるシナリオを構築。客席中央まで大胆にせり出した舞台、映像を駆使したスタイリッシュなセットで、俳優や歌手たちが動き始めます。

彼らは「蝶々夫人」の時代と物語を21世紀の目で客観的に眺める視線— 私たち観客と同じ空間に生きる現代人です。

そこにあるのは、共感？反発？矛盾？憧れ？
—“未知数”をあらわす“X”が2つの世界の間立ちあがります。

Message

“ある晴れた日に”などの名曲アリアを歌うのはいずれも実力派と目される二期会歌手たち。“蝶々さん”には、今最も実力ある若手ソプラノのひとりと期待される嘉目真木子さんに白羽の矢が立ちました。お二人のメッセージをご紹介します！

《演出家と出演者たちが対話して創り上げる舞台》

亜門

嘉目さんとの出会いは二期会オペラ『フィガロの結婚』。初めて稽古場で声を聴いたとき「力があり色々な表現ができるなんていい声」と感激しました。稽古を重ねるうちに演技もどんどん変貌していく。「いったい彼女は何者？」と周りのスタッフに尋ねたら「今色々な演出家から指名が一押しということでした。」

嘉目

これからもおほめいただけるよう、歌だけでなく演技もしっかり勉強していきたいと思います。芝居は好きでよく観に行きますが、個人プレーで見せる芝居より、出演者たちが一丸となってコンセプトを実現させているような舞台を見ると、あぁいいな、役者さんたちも楽しそうだなと思います。

亜門

演出家と出演者の対話は非常に大切。僕はオペラの稽古場で、もっとみなさんとアイデアや意見を自由に出し合いエネルギーをぶつけ合って、一丸となって舞台をつくっていきたい。「マダムバタフライX」には指揮者もおらず、とてもシンプルなアンサンブル編成。でもバロック時代のように、歌手と俳優、演奏家のみなさんは、互いの呼吸を感じながら舞台を創り上げていくことができるはず。そのことによってドラマをより際立たせたいと思っています。

《幻想のヒロイン像、蝶々さん?》

嘉目

一途に愛を貫いた純真な女性、というのが一般的な蝶々さんのイメージ。たしかにそうなのですが、私は蝶々さんが子どもを残して死を選んだことに、ちょっと違和感を覚えます。いろいろな資料を読むと、プッチーニは女性信仰の強い人だったとのことで、彼の理想像も投影されているのかも。

亜門

原作では蝶々さんはもっと激しく強い人に描かれています。プッチーニはその舞台に感激してオペラを書き始めたわけですが、日本に来たことはなかった。オペラをつくる過程で、蝶々さんという女性がどんどん男性目線で可愛らしく“耐える女性”に仕立てられていったように思います。音楽があまりにいとおいしく甘美なメロディゆえ、身勝手さも全て包み込まれ、蝶々さんがひたすら美しい存在になっている。「日本に来たことのない外国人から見た」“理想の女性像”であった気がします。そんなイメージだけの物語を、現代の人々がリアルに感じられるように構想を練っています。

嘉目

「3年も待っていた蝶々さんは馬鹿みたい…」と思われてしまう舞台は演じる側として嫌。ピンカートンは結果的にひどい男だったとしても、蝶々さんにとっては素敵で誠実な男性だったと思いたい。でなければ一途に信じて待ち続けるはずがない。少なくとも、蝶々さんと愛を誓い合う二重唱の瞬間は、二人の間に真実の愛があったと信じたいです。

《新鮮なオペラ体験を味わって》

亜門

「蝶々夫人」が時代の生んだ大悲劇であることを、現代の視点を通して描けるといい。いま考えているのは、舞台上で歌手によるオペラ「蝶々夫人」が演じられ、そのまわりに現代人の登場人物を配するということ。蝶々さんを演じるのは生身の女性で、舞台の上で蝶々さんに作り上げられていく過程も見せたい。

行き場のない状況でなんとか生きよう、信じようとする15歳の女性、という蝶々さんの設定はそのまま踏襲します。そのうえで蝶々さんがどう見えるか—それは、観る方々それぞれに委ねたい。

オペラは様々な決まりごとがある世界ですが、だからこそ今世界各地であらゆる試行錯誤が行われています。KAATであえてオペラに挑戦することで、これまでとちょっと違う視点でヒロインを観てもらえるのではないかと思います。

「オペラはこうあるべき」という概念を捨てて自由に発想し、まだオペラを見たことない方にも見て欲しいです。

(神奈川芸術プレス最新号などより抜粋)